

風土



満願

神蔵

器

庭に来て蝶よとんぼよ足ながよ

田水燃え稲の分蘖音に出て

桂郎の一本橋やかじか鳴く

大いなる七夕竹を伐り出せり

太宰忌やヴィヨンの妻むらさきに

鷗外忌「キタ・セクスアリス」掌に
珍客に這つて四五尺茗荷の子
端溪に今宵の星の一としづく
蓮の花ひらくとたより中尊寺
満願や胡瓜と茄子と太^ひ陽が流れ
笛・太鼓神田大川さかのぼる
迎へ火のたつた一人に多勢かな



竹間集

同人作品



長梅雨

塩田 杉郎

書かねばの札状いくつ梅雨長し
梅雨籠り読みかけの本見上げては
兼題に縛られてゐる梅雨籠り
梅雨長し軒下に剪る鉢のもの
梅雨晴やみな傘振つて下校の子
夏至さいしたま句会の日の大きな駅に迷ひけり
梅雨晴のビル高層に句座涼し

大 暑

田中佐知子

水打つて上三之町明くるかな
朝市に七味を買へる大暑かな
朝涼し赤蕪を売る飛驒訛
朝市を外れ川風の涼しかり
合掌造りの窓に溢るる朴若葉
緑さす木彫りは熊になるらしく
放水銃のほとり夏草刈られあり

大青田

工藤ミネ子

水芭蕉出しそびれたる文のごと
子つばめの巢に余りたる顎ならべ
アオヤジロ匿ふごとく走り梅雨
風足のざらつく辺り墓
行行子忘れたきこと笑ひつつ
敗走の武將の伝記大青田
梅雨空に階重ね神御座す

柿の花 柴田 久子

反転の鯉の一息桜桃忌
山荘のポストのメモや夏燕
水を出て鮎のおどろく眼かな
山彦はもう呼べぬ齡朴の花
浅草寺裏より回る夏帽子
ふるさとは湖と筑波と柿の花
柿の花生きるがために死の書買ふ

夏 燕 中村 洋子

夏燕路地の奥まで銀座かな
ひび一つ塗り椀にあり走り梅雨
青梅のはね長崎の石畳
頬杖の遠き眼差し桜桃忌
蛩飛ぶ闇に起伏のありにけり
花菖蒲むらさきの風起こりけり
太陽は南五十度立葵

走り梅雨 橋添やよひ

気位と見し在五忌の花菖蒲
青柿落つ音の深みや鑑真忌
青菽や会津藩士の墓高き
一列に修行僧ゆく走り梅雨
夏蝶や紫式部の墓処
万緑の中叡山の不滅の灯
神苑古橋寛さんの風の涼しき一会かな

枇杷熟る 浅田 光代

金色の水玉持てり蓮浮葉
麦熟れて若狭はまろき山ばかり
揚羽蝶かつて庄屋の堀越えず
睡蓮や一服の茶をたなごころ
陶片の散らばつてゐる草いきれ
枇杷熟るる芭蕉生家の土間固し
松尾家の寺十九代の藪蚊かな

いのちなりけり

南 うみを

蝮の道混み合うてゐて交はらず
寄居虫のバケツに鳴つて涅槃西風
啄むや睦むや春の田の鴉
あたたかや巢よりはみ出て鴉の尾
活けぬの鯛の尾ふるふ桜かな
でで虫の迷ひの角が葱の先
尺取にはるかな梢ありにけり
蜻蛉生るあかときの露うちふるひ

きしと音してあめんぼの弾き合ふ

蜘蛛の囿の糸は月に掛りあり

薔薇の芯酔ひどれ蜂を吐き出せり

梅雨入りをうかがふ葛の蔓の先

茨木和生氏の二ふかに

出水川鮎流れじと小石喰ふ

おはぐろにきのふの闇の匂ひあり

木下闇出でて蝶々高く消ゆ

柏手にあらず蚊を打つ音なるぞ

虫を喰ふやんまの顎がすぐそこに

ひぐらしの真上のこゑは刺しにけり

猪噴きし穴を均すや盆の道

野分晴すずめの声のうはずつて

山河集

同人作品



神蔵器選

時の日や大切株に渦二つ 生田 作

蔦の葉のてらてらとして梅雨兆す
螢火の闇にも起伏ありにけり
万緑の底鉄骨の火花散る
梅雨冷や漢和辞典の手に重く

小林 和子

いろは坂遠見る滝に掌を合はす
新茶汲む義姉百歳の坂を越え
足元も待たるる先も麦の秋
医通ひの旧知の顔や熱帯魚
薔薇切つて父の想ひ出なくなりぬ

鈴木 庸子

万緑や千二百年の高野山
緑立つ三山を置く大和かな
万緑へ迫り出す長谷寺舞台かな

石楠花を分けゆく女人高野かな
朝勤行はじまる宿坊水を打つ

熱きもの一品加へ夏料理 上村 葉子

六角に削るえんぴつ太宰の忌
豆飯や青き匂ひの湯気溢れ
小児科の面会ロビーの金魚玉
未完なる田んぼアートの早苗かな

森田 節子

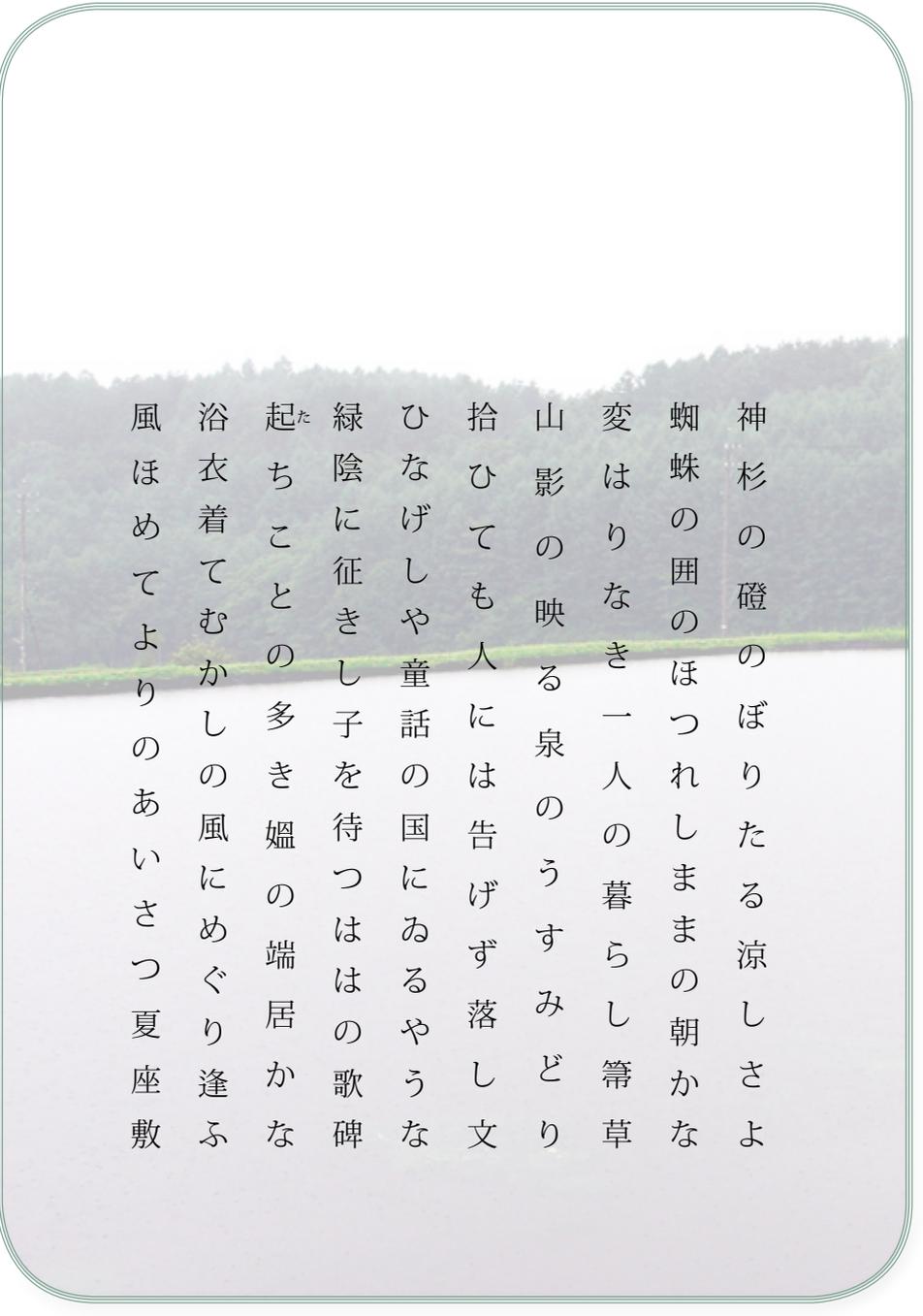
マリナーの木のデッキ濡れ大南風
雲の峰富士を回して出航す
天女舞ふ羽衣橋や走り梅雨
夏至の日の港に白き巨船泊つ
合歓の花矢倉の上に矢倉かな

◇特別作品◇

暦日

本間 羊山

新涼や茶筌にのこるうすみどり
つばめの子いきなり空をうらがへす
振花のねぢれきれずに雨欲しき
かはせみの青き残像水しぶき
夏空にむけて楢円の球を蹴る
おしやべりに似て南天の花軽し
旅ごころはじめし地図や夏帽子
ひとり家の灯を恋ひ火蛾のおびただし
空蟬のまだ登らむと身を反らし
野仏に一椀の水青すすすき



神杉の礎のぼりたる涼しさよ
蜘蛛の囿のほつれしままの朝かな
変はりなき一人の暮らし箒草
山影の映る泉のうすみどり
拾ひても人には告げず落し文
ひなげしや童話の国にゐるやうな
緑陰に征きし子を待つははの歌碑
起^たちことの多き媼の端居かな
浴衣着てむかしの風にめぐり逢ふ
風ほめてよりのあいさつ夏座敷

風土集



神蔵器選

文月やみふみてふ名の美しく

京都

杉本葉王子

雨あがり青柿の青より青く

梅雨長し英文メールのぶつきらぼう

身の丈の妻の昼寝のソファアかな

和久傳の茅の輪潜りて卓につく

木下闇 嶋立沢に耳すます

横浜

安永圭子

西行の化身と見ゆる夏の蝶

黒南風の誘ふ静けさ円位堂

海鷗来るこゆるぎ浜に初対面

朝涼や祈念に拾ふさざれ石

万緑をいちにのさんと飛び出せり

福生

雨宮桂子

天上のこゑてのひらに合歡の花

重たげや登竜門てふ花菖蒲

野花菖蒲風が恋しくなげにけり

ほたるぶくろひひとりぼつちがいやになり

梶子や一人に大き男傘

東京

奥田茶々

鮎料理貴船に遅き月上がる

梅雨入やのれんで仕切る通り土間

骨折に五キ口の重り実梅落つ

下校の子ダチュラの花に触れてゆく

あいさん

川崎

鈴木庸子

ひかへめな涼しき所作や『柿の花』

父の日や父のいさうな骨董屋

母よりの格言いくつ梅漬ける

梶子の匂ふ木戸まで送りけり

夏至の日を使ひ余してをりにけり

鮎釣りに行く父の顔父の声

川崎

井口ふみ緒

本局へ一駅を乗る走り梅雨

六月の舌にとけゆく和三盆

菩提寺に経をよむ会くわくこう鳴く

籌持つ兄の後ろや蛩狩る
止まり木に孫とワインや巴里祭

遠藤逍遙子

睡毛長き嬰兒眠りぬ合歓の花
歩をゆるめ傾ぐ日傘の会釈かな
輪になつてフオークダンスやさくらんぼ

晚鐘を封じ込めたる蛩袋
商店街人の頭上を夏つばめ

須藤美智子

老いること忘れてをりし水中花

万緑や遊行柳もその中に
夏鶯これより三里勿来かな

六月の月の潤みて出でにけり
道をしへ杓子庵へと急ぎけり

小林 共代

垣結はず中勘助の夏館
杓子庵の影で育ちし茗荷の子

青東風やふれあひの間に『銀の匙』
万緑や川の名変はる分水嶺

絵団扇や鎌倉研師の菊一

下山田美江

柿の花子規の絶筆三句かな
畳目をネイルカラーの跣かな

パリ祭やフランス映画のジャンギャパン
夏草や塔の頭に堂一つ

ほうたるの一つ抜け出て高舞へる

津山 生田 作

六月の水声あげてたばしれる
大櫂梅雨の晴間の空揺らす
青梅雨や猫したたかに濡れ戻る

田の中の鷺首伸ばす梅雨晴間
十葉の花に夜来る縁の下

生田恵美子

十葉を打つ雨樋の水溢れ
枇杷熟れて真顔で奔る井手の水

生ひ立ちの話膨らむ桜桃忌
山の家の屋根に人立つ梅雨晴間

大櫂立つて水神祭 笛

福田周草

郭公の鳴き声清し正一位
南無宇宙観音菩薩盆の月

人生は楽しかるべし蟬しぐれ
引揚げの丘

この丘はいくさの坩堝敗戦忌
大甕の坐る寺領や雲の峰

水井千鶴子

甲斐信濃つらなる空や濃紫陽花
風鈴草母の知らざる齡過ぐ

戦なき広き空あり夾竹桃
芭蕉庵の池にとび込む雨蛙

そば笹の三十千せる寺立夏
なかなづく波郷の墓の若葉風

間島あきら